

# 報 会 窓 同 京 東 高 館

第 30 号 平成 28 年 2 月 発行

発刊にあたって

## 垣根のない同窓会

会 長 鈴木 昇  
(昭和 35 年卒)



戦後 70 年、世界の情勢は大きく変化しており、改めて平和が希求されていますが、皆様にはご清祥のことと察します。さて、第 34 回定時総会において会長に再選されました。私自身、会長の若返りを提唱してきましたので、内心忸怩たる思いがありますが、皆様のご協力を仰ぎながら会発展に努めていきたいと思っております。よろしくお願いたします。

少子高齢化により在京同窓生が減ってきている、あるいは価値観の多様化により、このような組織への参加意識が変わってきていると云う流れは認識しています。とは言え、同窓会の良さを少しでも多くの同窓生に伝えるべく、3 年前に東京同窓会独自のブログを立ち上げ、更に、アクセス数を増やすべく、本校及び本校同窓会に働きかけ、本校のホームページに「同窓会」項目を新設して戴きました。このブログを通し活動状況を広報し、併せて本会報を通し参加を呼びかけてきました。また、楽しい同窓会をコンセプトに、観桜会では若手の津軽三味線女性奏者をお招きし、納涼会では若手のハープ奏者をお招きして彩を添え好評を博しました。

会員の皆様は実に様々な分野の多士済々の方々が参加しており、年代を越えての交流が続いています。互いに視野を広げ、人脈を広げる場となっています。過日の第 34 回定時総会後の講演会では、同窓生でキンビール(株) 元社長の松沢幸一氏 (昭和 42 卒) から実績に裏づけられた、説得力ある貴重な講演をして戴き感銘を受け、同窓であることを誇りに思いました (講演内容は別稿をご覧ください)。講演会後の懇親会にも参加して会員の皆様と長時間懇談して戴きました。日頃接する機会が少ない多くの方々と垣根のない交流が図られており、有形、無形の意義は大きいものがあると思っております。会員は徐々に増えてきています。

今年も観桜会、納涼会、講演会、ゴルフ会を企画しています。日程は館林高校ホームページの「同窓会」でお知らせします。是非ご参加下さい。また、皆様の元気な姿、消息を出来るだけ多くお伝えしていきたいと思っております。多くの投稿をお待ちしています。

引き続き、本校と連繫をとり、人と人を繋ぐ同窓会発展に努めてまいります。

# 第34回 定時総会

平成27年10月31日(土) ホテルグランドパレスにおいて標記開催された。会員による総会後、ご来賓を迎えて講演会、懇親会が開催された。

## 1. 総会

鈴木昇会長(昭和35年卒)の挨拶後、篠崎睦男(昭和40年卒)を議長に選出し、招集通知で案内された議題について審議を行った。

議題は、平成27年度事業報告・決算報告・監査報告、役員改選、平成28年度事業案・予算案について出席会員諸氏の協力により全て承認、可決された。

役員改選は、事務局長の横山英和副会長(昭和40年卒)、河村博副会長(昭和51年卒)の退任と新事務局長に谷田部和之副会長(昭和35年卒)、事務局長補佐に小林信夫副会長(昭和45年卒)の選出および若年層の会員増強を図るため平成5年卒の五十嵐圭氏を副会長(HP担当)に選出した。承認された平成28年度の事業計画、予算は表の通り。

## 平成28年度、29年度役員

**名誉会長**：鈴木敏男(S23年卒) **顧問**：岩崎三樹(S23年卒)、中村茂八郎(S25年卒)、大隈清道(S29年卒)

**会長**：鈴木昇(S35年卒)

**副会長**：谷田部和之(事務局長兼会報総括 S35年卒)、相澤建志(会計担当 S36年卒)、藤井基且(会報担当 S37年卒)、篠崎睦男(会報担当 S40年卒)、渡邊智三(広報担当 S40年卒)、小倉巧(広報担当 S43年卒)、奥澤康文(HP担当 S45年卒)、小林功一(会計担当 S54年卒)、中野栄一(HP担当 S54年卒)、深町司(HP担当 S61年卒)、五十嵐圭(HP担当 H05年卒)、大輪浩幸(HP担当 H07年卒)

**監査**：内田信也(S30年卒)、長谷川馨(S33年卒)

## 2. 講演会

昭和42年卒の松沢幸一氏(千代田町出身、キリンビール(株)元社長)を講師に「人を活かし人を育てる—リーダーの仕事—」をテーマに行われた。

館林高校・大学時代の思い出話からキリンビール(株)入社の際、その後の会社内での実績等楽しく語られ、その中で、いかにリーダーとして社員をまとめ会社の発展に繋げるか、その方策について大変興味を引き付ける内容であった。

## 3. 懇親会

前山秀樹本校同窓会長、上田裕信教頭(県立館林高等学校)を始め本校同窓会各支部長及び他校同窓会関係者、会員が参加した。鈴木昇会長の挨拶後、前山会長、上田教頭から近況報告がなされ、続いて鈴木敏男名誉会長(昭和23年卒)の音頭で乾杯し、和やかな雰囲気の中で旧交を温め、新旧の校歌を斉唱して散会した。

## 4. 参加者

・来賓 15名 前山秀樹同窓会長、各支部長、上田裕信館林高校教頭、他校同窓会関係者  
・会員 39名

平成28年度 事業計画(35期) 平成27年10月～平成28年9月

年月日	事項	場所
平成27年10月31日	第34回定時総会	ホテル グランドパレス
11月12日	東京同窓会懇親ゴルフ	大宮ゴルフコース
11月14日	本校同窓会総会参加	館林市・ジョイハウス
12月	役員会	
平成28年2月	役員会	
2月	第30号会報発行	
4月	第1回理事会・観桜会	
5月11日	本校同窓会ゴルフ会	板倉ゴルフ場
6月	役員会	
7月	2回理事会・納涼会	
9月	役員会	

注) 群馬県人会連合会、首都圏東毛3校会、本校同窓会各支部、館女高など他校首都圏同窓会との交流等は随時行う予定です。

## 第35期 予算

(平成27年10月～平成28年9月)

### 収入の部

(金額単位：円)

科目	金額	備考
前期繰越金	62,485	
年会費収入	480,000	160名×3千円
總會費収入	210,000	30名×7千円
懇親会収入	410,000	観桜会40名×5千円 納涼会35名×6千円
広告料収入	30,000	10件×3千円
雑収入	260,500	祝い金、寄付金、預金利息
合計	1,452,985	

### 支出の部

科目	金額	備考
總會運営費	310,000	40名×7千円他
懇親会運営費	410,000	観桜会40名×5千円 納涼会35名×6千円
印刷代	270,000	
通信費	310,000	
交流費	80,000	
雑費	20,000	
次期繰越金	52,985	
合計	1,452,985	

# 人を活かし、人を育てる —リーダーの仕事—

総会講演



昭和42年卒  
松沢 幸一

## はじめに

本日は、お話しする機会を与えられたことを大変光栄に思います。キリンビールに39年間勤めました。ビール製造技術者として入社しまし

たが、仕事をやっていくうち、次第に人や組織のあり方、リーダーとしての組織マネジメントについて関心を持つようになりました。そして、人を活かし、人を育てることが組織に活力をもたらす、その持続的発展に最も重要な要素であることを確信するようになりました。

そういう経験を踏まえて、リーダーの仕事ということでお話ししたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

## 館林高校から北大まで

私は昭和23年12月、邑楽郡旧富永村（現千代田町）に生まれ育ちました。小学校では天体・気象観測や工作などを熱心にやっていた記憶がありますが、水浴び・魚とり、農作業や家事の手伝いなどで大半の時間を過ごし、学校以外で勉強することはありませんでした。中学校まではお互いに良く見知った友とのんびり過ごしました。昭和39年4月、館高普通科に入学しましたが、邑楽館林でも言葉が随分異なっており、人の様子も違うものだと驚きもしました。自分の世界が一気に広がったような気がしたものです。その年10月の東京オリンピックでは、小幡（上武）洋次郎先輩がレスリングで金メダルを取りました。

館高では、1年次荻野次雄先生、2～3年次奥澤義一先生が担任でした。サッカーの飯島徳治先生、レスリングの久保田利重先生、山男でロマンチストの藤巻光夫先生など個性的な先生が揃っていました。また、小島（おじま）俊作校長は懐が深く穏やかで、自由な校風をつくっていた立派な先生でした。中には政治的な発言や活動をしていた先生や生徒もいましたが、私は運動部にも入らず政治的な活動にも巻き込まれず、普通の学生として過ごしました。

大学は地球物理学を勉強して南極越冬観測員になりたいという希望を持って北大に進みました。しかし、途中で志望を変更し、2年生後期に農学部農芸化学科へ進学しました。農芸化学は、土壌学、作物生理学、農薬化学、食品栄養学、天然物有機化学、発酵・抗生物質生産などの応用菌学、酵素化学など幅広い分野を領域としていました。理論や真理の探究ではなく、農業や

食品・医療などと関係が強く、実験や試験を繰り返しながら人間に有用な成果を引き出していく学問です。

これが私にマッチしていたのでしょうか。この分野の勉強に大いに興味がわくようになりました。そこで、修士課程まで進み、生物化学研究室で酵素の働きについての知識を深めました。

また、館高時代は出来なかったサッカーをやるために体育会のサッカー部に入部しました。国立大学の運動部にも拘わらず練習は厳しく土日もありませんでした（普段は監督・コーチの指導はなく）、上級生を中心に部員全員で自主的に話し合いながら活動していました。コミュニケーションとチームワークの基礎はこの時に身についたのではと思いますが、サッカー部の仲間と経験は今でも私の大きな財産になっています。その後、40歳になるまで実際にプレーを続けましたが、今でも元気に動ける体力・気力は、そのお陰と思っています。

## キリンビール技術員時代の気付き

就職先は、食品・薬品メーカーなどのうちからキリンビールにしました。キリンで何かやってやろうというような特別な思いを持っていたわけではありませんでしたが、父はキリンしか飲みませんでしたし、数年前に高崎に工場と研究所が出来たばかりでしたので、なんとなく決めました。

昭和48年春キリンビール福岡工場に入社しましたが、当時は会社の全盛期で造れば飛ぶように売れる時代でした。福岡工場ではキリンビールの大塚（現在のキリンラガー）の製造が殆どで、事務所の中には「新入社員は余計なことはしなくていい」という空気が蔓延していました。そのため、入社1年目は大した技術課題もないままに漫然と日々を過ごしていましたが、次第に「自分はこの会社になくてもいいじゃないか」、「こんなつまらない会社は辞めよう」と思い始めました。

30年後のOB会で私の課長と同僚だった先輩から「君も役員になったか。新入社員の君の考課は100点満点の45点だったのに…」ということを知りましたが、たいした仕事もせずにぶらぶらしていたので低い評価だったのは当然だったと思いました。このことから、若い人たちにはリーダーが目標となる仕事をきちんと示し、その仕事ぶりをフォローしてやるのが大切だと思います。

自分が大きく変わるきっかけになったのは、入社2年目に本社が主催する排水高度処理技術研究プロジェクトのメンバーに選ばれ、そのリーダーと出会ったことでした。その方（後に副社長）は、「水は貴重な資源である。現在、1リットルのビールを造るのに15リットルもの水を使っている。また、排水は活性汚泥法で浄化処理して放流しているが、処理水の水質レベルを上げて、再利用できるまでにする必要がある」と熱く語っていました。

この言葉から、「技術で会社に貢献できる。しかもそれが社会にも役立つことにつながる」と気付きました。その後、仕事の意義を考えるようになってからは、会社を辞めようとは思わなくなりました。

次に異動した高崎の研究所では、ビール酵母の性質調査と優良株の選抜という仕事をやりました。研究員の多くが、高度分析機器を使ったカッコいい仕事をしていましたが、私の仕事は酵母を培養して発酵させ、その経過をみるだけというローテクの極みでした。しかも社外発表はできません。3年間同じことを続けたのですが、なかなかモチベーションがあがる仕事ではありませんでした。しかし、「結果がでるまで3年間はやり続けてみなさい」と毎日のように上司から指導・励ましがありました。今日、キリンビールが「一番搾り」の製造などに使っている酵母はこの時に見つけ出したものです。発酵タンクの大きさや形状など発酵工程のテクノロジーが変化し、それに合った酵母が必要になったわけです。ネバー・ギブアップの精神で粘り強くやることも重要なことだと思知らされた経験です。この時の上司にも感謝しています。

### 中間管理職としての気付き

もう一回、40歳から約4年間京都工場で製造部長を務めた時に大きな転機がありました。それまでずっと技術員として工場や研究所、本社などで仕事をしていましたが、会社は上から動くものと思っていました。

会社（上の者）が決めたことを、下の者がやるものだと思っていました。しかし、現場の社員約100人と仕事をしていくうちに、それは大きな間違いであると気付きました。

当時の京都工場は設備が老朽化し、現場作業は人手に頼った仕事が多く、機械の故障やビールの流出、はては労働災害などの事故・トラブルが多発していました。また、発酵制御も不安定でビール品質にもばらつきがありました。なんとか改善していかなくてはと思いましたが、製造・技術・品質などの基準類、作業マニュアルなどを整備して、管理者が口を酸っぱくして効率化・品質向上・事故防止などといっても、現場の仕事は変わらないということに気付きました。第一線の人たちは目の前にある自分の仕事と格闘するのに精一杯だったのです。

そこで、私は状況を変えるために、リーダーとして何をすべきか改めて考え直し、実践するように努めました。方針や目標をいうだけでなく、一人一人の課題がなんであるのかを汲み

取り、それを組織（チーム）の課題として位置づけ、チームとして解決していくように仕向けて行きました。会議・打ち合わせのやり方や情報の伝え方なども見直していきました。次第に、現場でのチームワークの動きが見えるようになり、事務所とも一体なった取り組みが出来るようになっていきました。その結果、事故・トラブルは減り、原価削減や品質でも成果が上がって行きました。

また、京都工場ではもう一人の素晴らしいリーダーと出会いました。珍しく人事労務系の工場長でしたが、この人からも多くを学びました。普通の工場長であれば、原価や品質などの細かい数値目標を示し、あとは現場にやってもらうというスタイルのマネジメントでしたが、彼の場合は全く違っていました。この人は京都工場を「社会に開かれた工場」、「人間中心の工場」にしたいという目標を示しました。

今でこそCRSとか、人材育成、組織の活性化などが重要な経営課題であるといわれていますが、当時としては非常に先進的な目標を示してくれたと思います。最初は具体的にどうということなのか、そしてそれを実現するためには何をやらねば良いかなど、まったくわかりませんでした。部長などのマネージャー層から話し合いを始め、現場の人たちへもディスカッションを進め、合宿なども行って行きました。係や班毎に具体的な行動目標をつくってもらい、担当や納期をはっきりさせ徹底するようにしました。その結果、臨時社員や業務委託先社員までが、お互いに挨拶を交わし気軽に話すようになりました。工場長も皆から「明楽（あきら）さん」と気さくに呼びかけられるなど、明るい雰囲気の工場になって行きました。

自分たちでやることを考えて実行すること、自分の仕事だけでなく社会や人を考えながら次の目標をつくっていくことがとても重要である、ということを示してくれたわけです。私は「ああ、こういうリーダーシップがあるのだ」と気付かされ、その後の会社生活に非常に大きな影響を受けました。

### 社長として思っていたこと、取り組んだこと

社長になった時、「信条は前向き・誠実・自然体」、「権威にへつらわず・おもねず・ひるまずに毅然と立つ」、「下の人や弱者へ優しい視線を



京都工場時代の写真。下段の左から2番目は、松沢氏が多大影響を受けた明楽昌夫工場長。松沢氏は、中段右から2番目

持ち品格ある行動をする」ということを決め、社内外で言うようにしました。この辺は渋沢栄一や新渡戸稲造に影響を受けたのかもしれませんが。また、「坂の上の雲」に登場する秋山好古陸軍中將も好きなリーダー像の一人として頭に置いていました。冷静に彼我の状況を観察し、柔軟に対応する現実路線を貫いた軍人です。劣弱な日本騎兵には軽機関銃を持たせて世界最強のコザック騎兵に対峙し、敵が圧倒的に攻撃している時は塹壕でじっと耐えて時を待つなど、新しい発想と柔軟な現場対応力をもっていました。退役後は故郷の松山で校長として余生を送った人です。

私は会社について、次のように考えていました。まず、会社の新たな価値を生み出すのは人材、技術・ノウハウ、企業文化・風土などのインビジブル・アセット（見えざる資産）が最も重要だということです。マスコミとか機関投資家・アナリスト、経営者の中には、株式時価総額であるとか、収益見込み、資本効率など、数値で企業価値を考える向きが多いと思います。しかし、これは会社の売買や事業投資の際の目安にする指標であって、真の会社価値・実力ではないだろうと思っているわけです。キンビールであれば、お客様一人一人に飲んでいたぐく1杯のビールの総和が会社の実力であって、それを生み出すための力が会社価値そのものではないかなと思っています。そして、お客様、社会から評価していただける会社であり続けたい、そんな意識をもって普段の仕事をやっていました。

また、「会社はゴールのない駅伝レース」とも常々言っていました。私たちは事業やブランド、信用を次世代に引き継いでいく責任を負っています。社長だけでなくすべての社員が自分の仕事の襷を背負って仕事をしているのです。その襷は次の担当者にきちんと引き継がれねばなりません。キンビールの事業は100年以上続いてきましたが、これからもしっかりと継続できるよう最善を尽くしていきたいと思っていました。

また、会社を強いサッカーチームのようにしたいとも考えていました。サッカーでは、プレイヤーはゲーム中に監督とかコーチの指示をいちいち聞いている暇はありません。自分で局面を理解し、自らの判断でベストのプレーをしなくてはなりません。そして、11人の仲間とコミュニケーションをとりながらチームとして勝つことが求められます。社員一人一人が自立して適切な判断と行動する必要があります。社長のやるべきことは、社会や市場・お客様の動き、そして会社の状況など全体を見て、それに対処する大きな方針を出し、難しい時の判断を逃がずに下し、いざという時に責任を取るのだと思います。

それらを具現化するために、特に人材育成と組織力の強化に努めました。新入社員研修から始まるキャリア別や職能別の研修はいろいろありますが、そういうものとは別に一人一人が自立して考え、適切な行動ができるサッカー型の

自立人間を育てる、そしてコミュニケーション能力を上げチームワークを上げられるような様々なプログラムを取り入れました。コーチング、質問会議、カイゼン提案、目標達成力強化セミナー、ありがとうの手紙、ワールドカフェ、というようなコンテンツです。

これをV10プロジェクトという専任スタッフもおいた組織をつくって全社的に取り進めました。それに加えて、社長と社員との対話集会も全国各地でやりました。事前にシナリオを決めず、その場で質問や意見の受け応えをするという“がらんこの対話”で労力はかかりましたが、東日本大震災があった2011年でも全国で約50回、2,000人以上の従業員と直接話す機会をもちました。また、その議事録は役員や部門長などに回付して、現場第一線と経営陣の距離や認識の相違を縮めようと努めました。

この取組みの中ではとりわけ、コーチングが自主自立で動ける人材の育成とチームワークづくりに効果があったと思います。コーチングは、ティーチング、アドバイジング、コンサルティングと異なり、答や解決策（ソリューション）、そこへ行く道筋を教えるものではありません。コーチが様々な質問しながら、受ける人が自分で考える、深く考える、多面的な見方・考え方をしよう仕向けて行くのです。そのプロセスを繰り返しながらその人の能力を最大限引き出すという育成の手法です。コーチは教えるのではなくサポート役に徹するわけです。従って、この方法はサッカー型の人間・リーダーを造るのに最も適していると思いました。

一般的にコーチングはそれを職業とするプロのコーチが（特に社長・役員などのエグゼクティブ層を対象とする場合は）実際のコーチ役を務めますが、キンビールでは毎年100人を外部講習に派遣して勉強してもらい、認定コーチという資格をとってもらいました。4年間で計400人の認定コーチが生まれ、それらの社員コーチが別の社員にコーチングをするという新しいモデルをつくり上げました。所属部門や役職などに拘わらない縦横自在なコーチとコーチングを受ける人の関係をつくりました。私自身も3年間、毎月1時間、企画部門マネージャーの女性社員からコーチングを受けていました。このことはNHKクローズアップ現代にもとりあげられました（2011年9月27日放映）、結果的に社員一人一人の考え・行動にポジティブな影響が培われるようになり、組織の発展を長期に渡



って支える力がついてきたと思っています。

もう一つ社長時代の思い出として、2011年3月11日に起きた東日本大震災でのことについて触れたいと思います。この震災では東日本の幾つかの事業所が被災し、全国的な商品供給などにも大きな影響が出ましたが、とりわけ震源地に近かった仙台工場は津波にも襲われ壊滅的ともいえる甚大な被害を受けました。しかし、工場にいた従業員、工事などの作業員、避難してきた近隣住民など、あわせて481人は全員建物の屋上に避難し、翌朝自衛隊によって無事救出されました。当時の工場長が「工場で全員待機」を決断し、その指示を徹底し、リーダーシップを発揮してくれたお蔭です。

被災した工場は500トンタンク4本が倒壊し、倉庫・製造工場内の商品や資材、一部の設備・機械・自動車などの物品や残骸が工場内外に散乱し足の踏み場もない状態になりました。テレビ・新聞などは「キリンビール仙台工場、壊滅的被害」と伝え、従業員や地域社会の人々からも「仙台工場はもう駄目だろう」、「閉鎖か？」などという噂や不安が起きました。私は被災後の工場を幾度か視察し、「被害は甚大だが壊滅的



倒壊した4基のブライトンピアタンク



散乱する自動車・パレット・樽など



ではない」と判断し、「東北が大きな痛手を受けたこの時こそキリンビールも出来ることを尽くすべきだ」と考えました。そして、仙台工場を立て直すことを決断し、4月7日に東北電力本社（仙台市）で記者会見を行いました。

まだ原発事故の収束の目途が立たず、全国的に日常生活や経済活動は混乱し、仙台市内も異常な様子でしたが、この発表で仙台工場の従業員のみならず全社員が復旧の決意で一体化し、被災地の皆様にも希望と勇気を伝えられたか思います。従業員たちは電気も重機などもない中で、骨の折れる手作業による片づけ・清掃をして頑張ってくれました。7月9日に東北電力からの電力供給が再開して復旧作業に加速がつき、全国の工場からの応援部隊も加わって9月には仕込み、10月下旬には缶詰め・樽詰めが再開され、11月2日には村井宮城県知事、奥山仙台市長にもご出席いただき出荷式を行うことが出来ました。岩手県遠野産ホップを使った「一番搾り」とれたてホップ生が仙台工場復旧後の最初の商品となりました。日頃から、企業は社会的存在で多様な役割を担うべきだと思っていたのですが、社長としての責任を些かでも果たせたかと思っています。

### まとめ

最後になりますが、若い人たちに伝えたいことを申し上げます。人に生かしてもらっていることを忘れずに、まわりの人たちのことを思いながら働らく、次の世代の人材を育てることを心掛けることが、これからのリーダーとしてとても大事なことだということです。

中間管理職は上下・周囲からの圧力が増しますが、「部下たちが気持ち良く力を発揮できる状態にする」ことを心掛け、チームとして最大の成果を出すことに重きを置いて考えて戴きたいと思えます。そのために、出来るだけフェース・ツー・フェースのコミュニケーションに努める、社会や経済、歴史などにも関心をもって自分の立ち位置を確認しながら、自分自身の成長も心掛ける、ことをお勧めします。こういうことがこれから新しいリーダーになる条件だと思います。大きな組織であっても小さなチームでも同じことです。

10年後の日本の社会や会社がどうなっていくか見通すことは難しいですが、多様な人の力を活かして新しい価値を生み出すことがますます重要になって来ると思えます。しかし、リーダーとして役割・責任をきちんと果たすという基本は変わらないでしょう。私もこれまでの経験を踏まえて、若い人たちの成長を支援するお手伝いをしたいと考えています。

これで私のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

まつざわ こういち：館林高校昭和42年卒。北海道大学農学部卒、同大学院修士課程（農芸化学専攻）修了。農学博士。キリンビール(株)元社長。北海道大学新渡戸カレッジフェロー、埼玉県人事委員、参天製薬(株)監査役。さいたま市浦和区在住、千代田町（旧富永村）出身。

## ふとすること

中村 茂八郎

昭和 25 年卒



編集部会から近況を書けとの話があり、85歳になる老体の近況とは何か、いささか戸惑った。

しかし、80歳を期に弁護士の実務からキツパリと離れて5年。来し方を静かに振り返る時間も出来て、私の50余年に亘る弁護士生活が戦後70年の激動の日本社会の中で公私に亘りどう機能したのかが気になって居たので、少々反省と自負を込めて振り返ってみることにした。

**その1** 私は弁護士社会の諸課題にそれなりの役割を果たし、後進の指導にも関わり、時には国や公共の業務にも関与し、評価は別としてそれなりのことは自分なりに力一杯努力を尽くしてきたと思っている。しかし、それが人としてどう生きたかということの総てではないことも明らかである。

私の生き態は私なりに自分で決めてきた積りではあるが、外見の私と私自身の内実との乖離に悩んだことも無い訳ではない。そもそも「弁護士とは何か」の答えを探しながら、その日その日をひたすら積み上げて来たに過ぎないようにも思えて仕方が無い。人としての社会的・家族的・個人的の三要素のバランスに欠けていたのではないかと・・・。

私は昭和35年に弁護士の登録をした。当時は所謂60年安保闘争の真只中で私自身デモにも参加したが、当然騒然としていた。しかし、敗戦直後の日本社会の急転回の際の人々の変わり身の速さが不愉快で保守・革新を問わず信用できず、それぞれの主張にも納得し切れないまま、どちらかと言えば事象対応の所謂ノンポリを決め込んでいた。もちろん、新憲法下の法学教育を受けて育った以上、理念的には方向は明確に見えていたし、主張もしたが、行動は慎重にならざるを得なかった。

日々の弁護士業務も、資本の走狗にもなれず、組織の群れにも与せず、何時しか小企業や所謂「三ちゃん」つまり、街の爺ちゃん・婆ちゃん・父ちゃんや母ちゃんの相談相手が主となった。そして、私は費用や報酬の領収書は必ず書いたが、請求書は求められない限り書いたことが無いまま50余年を過ごしてきた。

従って、生活が楽な筈もなく、家内や子供らには、仕事に追われていつも家に居らず、頼りにならない父親と思われても仕方が無いと覚悟はしていたが、もう少し子供らと一緒に時間が作れなかったかと悔やまれる。幸いなことに、

どうにか喰うに困らず過ごせたことには、心から家族はもちろん時代のおかげと感謝はしているが、結局のところ地位とか蓄財とかには殆んど無縁な存在になって居た。

しかし、内心何故もっと普通に稼げなかったか、幾らでもチャンスが在ったのに等という別の惟いも消せない。つまり、世間様の言う弁護士に成り切れず、我を通した自分を誇らしくも悲しくも見つめる己が居るのである。

**その2** ところで、最近の日本の政治の状況については怒りを含んだ心境ではある。東西冷戦に相似した力による緊張関係が形を変えて日本を包み込んでいる現実は理解できるのではあるが、それを力による抑止という核対決の産物を現状に当て嵌めようという想念への違和感である。

かつて、東西対決や朝鮮動乱の余波を受けて、日本国憲法9条の解釈が徐々に拡張されて既に限界に到達しているにも拘らず、更なる改憲的解釈変更を敢えて閣議決定したことに始まり、安保関連法案の国会提出とその後の論議に見られる、立憲主義を軽んじ、且つ法的安定性を無視する傾向は看過し得ない。

就中、民意を無視する発言の数々。政治は選挙で選ばれた政治家に委ねられているとは言え、憲法の解釈を勝手に変えることまで委ねている訳ではない。国の存立に関わる変化や生命の危機に敏感な民意の表現を無視して良いという権限を委ねている筈もない。日本を囲む諸状況の変化が、平和憲法の基本を変えなければならない程の変化であるとすれば、状況判断も含め憲法を改めるべきか否かを汎く国民に問うべきであり、民意を集約活用すべきであろう。

但し、私は改憲論者では無い。日本を囲む状況が徐々に変わっているとしても、戦後70年の平和の継続という実績が、日本の平和主義に基づくものであり、憲法が在ってこそのものであると考えている。私は憲法解釈が問われる度に、日本は「平和の輸出国」で在るべきであると想い描き、日本には外交による平和維持を強力に推し進める責任があると思い、真の平和は外交努力の中にこそ存在すると思うのだが・・・。

惟うに、平和という概念は固定したり完成したりしたものを指すものではない。与えられたりするものでもない。平穏な状態を作り出し維持する努力を継続する状況が平和な季をもたらすものであり、その努力を怠れば直ちに崩れ去る脆いものである。そもそも人間という動物は競争という美名に隠れて、本能的に征服するための争いの中で生きているのである。

平和はその本質を意識して自覚的に紛争を抑止することなしには到達しえないという矛盾をも含んだ概念なのである。故に本質的に脆弱な内実を孕んでいることは誰も否定出来ない筈のものなのである。

なのに、なのに・・・ふと考え込んでしまうのである。

(平成27年11月13日 85歳の誕生日に)

[東京都大田区在住 邑楽町(旧高島村)出身]

<p>館林高等学校東京同窓会名誉会長 群馬県人会連合会特別顧問 上毛倶楽部副理事長</p> <p style="text-align: center;"><b>鈴木 敏男</b> (23年卒)</p> <p>連絡先 〒121-0816 東京都足立区梅島 2-7-4 電話 / FAX 03-3886-8931 E-mail t.suzuki@nanayojapan.co.jp</p>	<p>葭葉法律事務所</p> <p style="text-align: center;">辯護士 <b>葭葉 昌司</b> (27年卒)</p> <p>〒106-0031 東京都港区西麻布 3-21-20 霞町コーポ 903号室 電話 03-6447-0446 FAX 03-3403-0675</p>
<p>震災予防研究会</p> <p style="text-align: center;">代表 <b>荒井 昭</b> (27年卒)</p> <p>〒177-0045 東京都練馬区石神井台 2-32-20 電話 03-3996-8122</p>	<p>テクニカルコーディネーター・建築家</p> <p style="text-align: center;"><b>大隈 清道</b> (29年卒)</p> <p>〒273-0022 船橋市海神西 1-1193-1-1006 電話 0474-33-6790</p>
<p>学校法人 関西外国語大学 関西外国語大学・大学院 関西外国語大学短期大学部</p> <p style="text-align: center;">教授 <b>内田 信也</b> (30年卒)</p> <p>自宅 〒177-0044 東京都練馬区上石神井 1-3-16 電話 03-3594-1173</p>	<p>社団法人 日本バーテンダー協会 国際バーテンダー協会 (I.B.A) 加盟</p> <p style="text-align: center;">名誉会員顧問 <b>長谷川 馨</b> (33年卒)</p> <p>カクテル&amp;ワイン K I Y O M I 〒140-0014 東京都品川区大井 1-10-1 電話 03-3772-9531</p>
<p>株式会社 鈴梅</p> <p style="text-align: center;">取締役会長 <b>鈴木 勝也</b> (33年卒)</p> <p>〒111-0051 東京都台東区蔵前 3-12-9 電話 03-3863-0120 FAX 03-3863-0139 E-mail k-suzuki@suzuume.co.jp http://www.suzuume.co.jp</p>	<p>館林高等学校東京同窓会会長 日本書道普及連盟</p> <p style="text-align: center;">評議員 <b>鈴木 昇</b> (35年卒) (龍道)</p> <p>〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-16-9 トーアビル 206 電話 03-3261-3121</p>
<p>株式会社 桂設計</p> <p style="text-align: center;">オーナー 会長 <b>太田 勝利</b> (35年卒)</p> <p>本社 〒162-0806 東京都新宿区榎町 43-1 ユニソ神楽坂ビル 電話 03-3269-6411 FAX 03-3269-6424 E-mail k.ota@katsurasekkei.co.jp http://www.katsurasekkei.co.jp</p>	<p>相澤・藤井法律事務所</p> <p style="text-align: center;">辯護士 <b>相澤 建志</b> (36年卒)</p> <p>〒104-0061 東京都中央区銀座 7-2-22 電話 03-3574-0880 (代) FAX 03-3572-0028 E-mail aizawa-l-o@nifty.com</p>



## 雑感—思い出すままに

荒井 昭  
昭和 27 年卒



原稿を書くように言われて、本当のところ全く戸惑った。何を書いていいかわからない。書きたいことが浮かんでこない。警視庁で現役のころはこんなことは全くなかった。総監や部長に下命されてから清書係を三人揃えて目の前に置き、30分の原稿であれば40分、1時間の原稿であれば1時間20分もあればたちどころに仕上げてお届け出来た。「うんこれでいいや」というご返事で修正を受けることも余りなかった。その頃は文章を書くのが好きだった。いろんな題で書いたが書くことが苦になることは一度もなかった。話をするのもそうだった。何時も頭の中に問題意識があり、常にそれへの対応をあれこれ考えていた。

昭和44年8月12日に後藤田正晴さんが警察庁長官に、高橋幹夫さんが警察庁次長になられ同日付で長官官房秘書室勤務を命じられた。46年2月26日警視庁の警備第一課へ戻していただくまで日々薫陶を頂いた。

後藤田長官からは二つのことを言われた。その一は兎も角本を読みなさい、出来るだけ幅広くたくさん本を読みなさいということ。もう一つは毎日、1日10分間、朝起きた時でも夜寝床の中でも、通勤の途中でもどこでも何時でもいいから自分が当面していることの中で一番大事に思っていることを集中して考える癖をつけなさい、その10分間は他のことは一切考えない、自分が一番大事だと思うことだけを確り考える癖をつけなさい、ということだった。

この一つのことだけを集中して考えるということはやってみるとなかなか難しく、大変だった。出来なかったというほうが正直なところだ。出来ないながらも頑張ったおかげで警視庁に戻ってからいろんな難問にぶつかっ

てもひるむことなく対応できたと思う。冒頭で昔は原稿がすらすら書けたと申し上げたがこの長官官房秘書室の経験が大いに役立ったのだと思っている。

高橋次長さんからは三つのことを言われた。高橋次長は内務省採用16年組で中曽根元総理と同期採用の方だ。高等文官試験一番という俊才で「たる」の愛称で親しまれていた。

まず言われたことは「人に親切を尽くしなさい」ということだった。「親切を尽くす」というのは君が親切を尽くしたと思うだけではだめで相手が本当に親切にされたと実感できる程度まで尽くしなさいといういろいろ例をあげながら丁寧にご指導をいただいた。

二つ目は「分を守れ」ということだった。それは「君がどんなに優秀でも君はあくまで秘書であるのだからその枠を超えてはいけない。誘惑もあるだろうが分限をしっかりと守りなさい」だった。

三つ目は「人間の研究をとことんやりなさい、そのためにはいろんな本を読んだり映画を見たりいろんな人と幅広く交際したりして人間というものをよく知りなさい。どういう犯人にぶつかっても常に人間力で相手を上回れるようにしなさい」というものだった。そういう方向で努力はしたつもりだが何処までやれたかは分からない。自信もない。

良く「警察では何処が一番大変だったですか」「一番忙しかったのはどこで勤務された時ですか」などと聞かれる。「どれも一緒です、常に全力投球ですから」と答えることにしている。

勿論、36年間余勤務したのだから忙しかったところもあれば時間的に余裕のある職場も当然あった。しかし、忙しければ大事なものから片付けて行けばいいのであって、時間的に余裕がなくて出来ないものは思い切って捨てればいいと割り切って対応してきた。また逆に時間に余裕があれば手間暇かけて出来るだけ丁寧にやるだけのことで、暇を持て余すということは全くなかったし、忙しければ他の人に頼むこともあっていいと思ってやってきた。

今は時間的には余裕があるので出来るだけ親切に対応したいと心がけている。

[東京都練馬区在住 板倉町出身]

<p>一般社団法人 日本・ネパール親善協会 会長 株式会社 サービス経済研究所 グローバル・アライアンスコンサルタンシー・サービス</p> <p>代表取締役 <b>山岸 正</b> (36年卒)</p> <p>〒170-0013 東京都豊島区東池袋 1-14-12 本多ビル 電話 03-5985-4945 FAX 03-5985-4945 E-mail hhe01366@nifty.com</p>	<p>US-Jコネクト株式会社</p> <p>社長 <b>谷田部 勝</b> (38年卒) Masaru "Mass" Yatabe</p> <p>202 SE 181 st Ave.Ste.202 Portland, OR 97233, U.S.A 電話 503-912-0613 E-mail myatabe@us-jconnect.com</p>
<p>杉並警友会</p> <p>会長 <b>小倉 巧</b> (43年卒)</p> <p>〒196-0002 東京都昭島市拝島町 4-20-23 電話 / FAX 042-546-3806 携帯電話 090-3420-9983</p>	<p>一般財団法人 日本不動産研究所</p> <p>常務理事 業務部長 <b>小林 信夫</b> (45年卒) 不動産鑑定士</p> <p>〒105-8485 東京都港区虎ノ門 1-3-2 勸銀不二屋ビル 電話 03-3503-5336 FAX 03-5512-7320 E-mail nobuo-kobayashi@jrei.jp http://www.reinet.or.jp</p>
<p>BFCA 経営財務支援協会 株式会社エム・エム・プラン</p> <p>代表取締役 <b>杉田 利雄</b> (46年卒)</p> <p>〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中公ビル 604 電話 03-5367-1558 FAX 03-5367-1668 E-mail sugita@kaikai-web.co.jp http://www.kaikai-web.co.jp</p>	<p>株式会社 ホテル グランドパレス</p> <p>代表取締役社長 <b>河村 博</b> (51年卒)</p> <p>〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 1-1-1 電話 03-3264-1111 (代) FAX 03-3264-5496 http://www.grandpalace.co.jp</p>
<p>医療法人社団 なかにし小児科クリニック</p> <p><b>中西 茂則</b> (53年卒)</p> <p>〒134-0088 東京都江戸川区西葛西 5-1-8 トーションビル 1F 電話 03-3675-6678 FAX 03-3675-6722 E-mail nakanishi@kids.email.ne.jp</p>	<p>小林公認会計士事務所</p> <p>公認会計士・税理士 <b>小林 功一</b> (54年卒)</p> <p>東京事務所 〒123-0851 東京都足立区梅田 8-5-6 電話 03-3880-2187 FAX 03-3880-2138 群馬事務所 〒370-0603 邑楽郡邑楽町中野 3013-14 電話 / FAX 0276-88-1844</p>
<p>豊田通商株式会社</p> <p>化学品・エレクトロニクス本部 本部長補佐 精密無機化学品SBU長 兼 機能無機化学品部部长</p> <p>執行役員 <b>神谷 哲也</b> (57年卒)</p> <p>東京本社 / 〒103-8208 東京都港区港南 2-3-13 電話 03-4306-5877 FAX 03-4306-8914 E-mail tetsuya_kamiya@toyota-tsusho.com http://www.toyota-tsusho.com</p>	<p>群馬県立館林高等学校東京同窓会</p> <p>副会長・事務局長 <b>谷田部 和之</b> (35年卒)</p> <p>〒343-0021 埼玉県越谷市大林 74-5 電話 048-974-6012 FAX 048-974-6680 E-mail kyatabe@ozzio.ne.jp</p>

## 島田豊作先生の思い出

正田 健一  
昭和 37 年卒



最近、同窓会東京支部の会合に久しぶりに顔を出したところ、本誌への寄稿を頼まれたので、近頃得た情報に基づき島田豊作先生について書くことにしました。

### 司馬遼太郎が島田先生について書いていた

私は、学業を終えて 30 年近く勤務した会社 (NTT) を辞めて、子会社へ移ったのを機にそれ迄に何点か読んでいた司馬作品を網羅的に読もうと思い、近くの図書館から全集 (\*1) を順次借り出すようになりました。その最終第 68 巻で島田先生に触れたエッセイに出会いました。

氏は、大阪外大蒙古語科在学中に学徒出陣で満州に出征した体験に基づき、日本民族の歴史的軌跡や人心の変容等について、鋭い筆致で独自の史観を提起していることで知られています。軍での所属は戦車隊で敗色が濃くなってから内地戦要員として帰国し、佐野で終戦を迎えたことが良く知られています。

その氏が、戦車に関するエッセイの中で、館林高校で教諭をしている島田豊作少佐が、マレー半島で中隊長として戦車隊を指揮し英国師団を潰走させた、と書いているのです。

### 教室での島田先生

私が、館高で島田先生に英語を教えていただいたのは確か 1 年の時、昭和 34 年です。今となって振り返ると、やっと敗戦後の混乱が収まりかけた頃で、当時は予科練帰りを自慢して生徒を叱咤激励する勇ましい先生も居られました。そうした中、島田先生は、“戦車隊長”と綽名で呼ばれていましたので勇名を馳せた方とは知っていましたが、温厚なお人柄で元軍人らしい猛々しさは微塵もなく、生徒達の人望を得ておられました。

教室でマレー戦の話を聞いた記憶はあります

が、他の同級生に尋ねると殆ど記憶していないところから、先生にとって勝ち戦ではあっても苦難の思い出であり、教室で話したのは稀で、私は好機に遭遇したのだと思います。館高同窓会名簿によると先生は、昭和 4 年館林中学を卒業され、戦後昭和 27 年 4 月から 52 年 3 月迄館高で英語を教えておられました。

### 先生のお嬢さん

司馬作品中に先生の記述があるのを知る以前、先生のお嬢さんと出会っていました。お嬢さんといっても館林中学で私の数年先輩に当たり、絵画の公募集団に所属して活躍している K さんです。

K さんの同級生が、私の幼稚園～館高迄の同級生、旧群馬銀行に隣接する料亭新寿の当主故須永洋一郎君の長姉 (肴町侍辺 (シベ) の稲荷近くでバー B & G を経営) で、その店は、カラオケもなく静かで懐かしい情報が入るので、帰郷の際に時折立ち寄っていました。そこに在った K さんの絵に話が及んだことから、館高以来絵を描き、最近館林邑楽美術協会展にも参加している私が、K さんが出展する展覧会を訪ねた際、偶々会う機会がありました。

### 先生のご著作等

こうした経緯から前記の司馬氏のエッセイのコピーを K さんに送付したところ、先生の自伝の著作 (\*2) が送られてきました。この自伝中には、マレー半島での戦車隊長としての活躍経緯はもちろんですが、戦記以外にも興味深い話が種々綴られていました。

長柄村 (現邑楽町) のご実家のサムライとしての由来、大正末に館林中学創立を目指し地元青年達が猛運動した模様、館林中学から初入学した陸軍士官学校における厳しい生活等です。単なる今はやりの自費出版でなく、市場にも流通した本のようなのです。

更にその後、書店の店頭で先生がかつて文藝春秋に書いた戦記を含む太平洋戦記の復刻版 (\*3) を見つけて、K さん宛に送りました。

皆さんも機会があればお目を通してください。

[東京都新宿区在住 旧館林町出身]

\*1: 司馬遼太郎全集…文藝春秋社刊

\*2: サムライ戦車隊長—島田戦車隊奮戦—

(昭和 59 年 4 月刊 (株)光人社)

\*3: 太平洋戦争の肉声 ①開戦 100 日の栄光

(平成 26 年 12 月刊/文春ムック:戦後 70 年企画全 4 巻) “鉄獅子は猛襲す—マレー半島攻略戦—”

# ネパール大地震被災地の 小学校へ図書館寄贈

山岸 正  
昭和 36 年卒

## ネパールの概要

まず最初にネパールの国についてお話しますと、場所は日本から 5,000 km 西へ行ったインドの北で、面積は北海道と東北 6 県を合わせた 15 万 km<sup>2</sup>程の小さな国です。しかし人口は 2,800 万人でスウェーデンやスイスの 3 倍もあって世界 43 位です。また湿地には 840 種の渡り鳥や常住鳥類がいて、世界の鳥類総数の 8% を占め、世界の 15 種の蝶類のうち 11 種類が、顕花植物の 2% が、さらに地球上の哺乳類の 4% がネパールに棲息していて、霊長類の世界では大國なのです。

それは何故かと申しますと、ネパールの地形に関係しているのです。南北僅か 230 km の短い距離の間に、北側はチベットに接してエベレスト山を初め 8,000m 級の山が 12 座あり、東西南はインドに接しており、タライ平原の海拔はわずか 70m です。

つまり、北は北極に匹敵する極寒の高地から南は酷暑の亜熱帯気候の地であり、そこにそれぞれの環境に適応した動植物が生殖しているからなのです。

## ネパール大地震と災害復興支援 活動

そんな豊かなネパールの大地に平成 27 年 4 月 25 日と 5 月 12 日、突然マグニチュード 7.8 と 7.3 の大地震が襲いました。

急峻な段々畑様の地形なので、震源地近辺はひとたまりもなく、家と住人は土砂と共に雪崩のごとく流されてしまったのです。震源地はカトマンズ北西 80 キロの地点で M7.8 を記録し、9,000 人が死亡、1 万 7 千人が負傷、国民の 3 割近くにあたる、およそ 800 万人が被災、90 万戸の家が倒壊しました。他方の震源地はカトマンズの東 60 キロの地点で M7.3 を記録し、200 人が死亡、2,500 人が負傷した。カトマンズ市内の世界遺産ダルバール広場では、多くの



世界遺産「ルンビニ」(釈迦の生誕地)の正門前でネパール友人と(中央が私)

寺院や建物壊れ、観光名所の「ダラハラ塔」も倒壊しました。

私は日本一ネパール親善協会の会長として即座に、インターネット等を通じて義援金募集を開始し、役員や会員への呼びかけ、また私自身、後樂園ホールの藤波プロレスチームの試合会場で募金箱を持って立ちました。目標額の 100 万円には至りませんでした。11 月 14 日現在 63 万円余が集まり、最も被害が大きかったシンドバルチョークの小学校の図書館建設に寄贈が決まり、12 月に義援金を引き渡す為にネパールへ行く予定です。

## 私とネパールの関係

私はシンクタンクの(財)国民経済研究協会でのサービス産業振興策提言等の調査・研究活動を経て、独立後も引き続き東京都や中小企業庁等の官庁を対象に、サービス産業振興を中心とする地域開発の仕事に取り組み、また松下電器産業インダストリー営業本部のマーケティング調査の仕事で 35 年ほどやりました。

そして第一線から身を引いていた頃、ネパールの技能実習生事業の仕事を手伝ってくれないかという話があり、平成 22 年 1 月、ネパールに本社のあるグローバル アライアンス コンサルタンシー サービス Pvt. Ltd. の日本支社長を引き受けました。

仕事の内容は、日本政府とネパール政府が協定を結んで、ネパールの技能実習生を日本の企業で 3 年間技能実習させて、帰国後本国の産業発展に寄与するという制度に基づいた事業で、具体的にはネパール技能実習生の受け入れ先企業を開拓し、実習生の入国手続きや入国後の面倒を受け入れ機関と協力して行うことです。

その関係から翌々年の平成 23 年 5 月に、ネパール本社社長の Limbu 氏が会長を務めている「Nepal-Japan friendship Society」(本部:カトマンズ)の姉妹団体、つまり(社)日本一ネパール親善協会を東京に設立しました。当協会の活動の主な目的は定款に定めた(1)日本国民とネパール国民が交流を通じて相互の理解と尊厳を重んじ、より良い友好・親善関係を築く為に寄与するイベント事業、(2)日本とネパールの経済的な相互交流を通じて、ネパール経済・産業振興の為に必要なマクロ的・ミクロ的経済・産業政策の提言やコンサルタント事業の 2 つです。

(1)については今年ネパールで藤波プロレスチームがネパールの子供たちに夢を与えるために訪問して試合をする予定でしたが地震で延期になりました。また(2)については、現在、最も力を入れた支援事業で、ネパールには産業が少ないために政府予算の 2~3 割が海外からの送金で賄われているほど海外への出稼者が多いので、技能実習生事業を活かしてネパール国内に産業を興し、雇用の場を増やすことです。

[一般社団法人日本一ネパール親善協会会長、サービス経済研究所代表取締役 茨城県古河市在住 旧伊奈良村出身]

# 万歩計・カメラ持参の 河川散策

小倉 巧

昭和 43 年卒



今は第二の人生で、スローライフを心掛けた生活をしています。昨今健康寿命という言葉をよく聞きますが、健康上問題がない状態で日常生活を送れる期間、すなわち日本人の健康寿命は男性 72.3 歳、女性 77.7 歳で世界一位です。この健康寿命を保持するためには、食事と運動が大切ですが、中でも歩くことが健康保持には不可欠のようです。私は健康寿命を延ばすべく、運動を兼ねて河川散策を継続しています。

## 河川散策のきっかけ

私は小岩警察署に勤務していた頃、デジカメと万歩計を持って江戸川を散策したことが河川散策のきっかけでした。万歩計はその日歩いた歩数距離が分かり、1 万 5 千歩を目標に歩きました。そして、ただ漫然と歩くだけではつまらないので、付近の歴史的・文化的場所があれば立寄り、記録としてデジカメで撮影しました。

また橋には必ず名前がついており、珍しい形の橋や変わった名前の橋を見つけた時は、シャッターチャンスであり、必ず撮影しました。そのためにもデジカメは必須の小道具です。いずれにしても、川に沿って歩くということは大変気持ち良く、また新たな発見もあり、その楽しみから河川散策を始めるようになりました。

## 最初の河川散策は江戸川から

最初の河川散策は江戸川でした。小岩警察署勤務だったので、事件事故が発生すればすぐに戻れる場所として、小岩警察署管内の江戸川は最適でした。小岩駅から葛西臨海公園までバスで行き、旧江戸川河口からスタートしました。

ちょっと寄り道をして、山本周五郎の小説の「青べか物語」の舞台となった、浦安まで足を伸ばし船宿等を見てから、その後はひたすら江戸川の上流に沿って歩きました。途中、京葉道路、JR 京葉線鉄橋、さらに総武線・京成線の鉄橋を見ながら柴又帝釈天まで歩きました。また寅さん記念館がある付近は、今にも寅さんが現れてきそうな土手で風情のある場所でした。

その後、2 回目は千葉県松戸市との県境の葛飾大橋まで歩きました。途中、水元公園や金町浄水場にも立寄りました。江戸川散策の見どころ

ろは葛西臨海公園から見るディズニーランドや柴又帝釈天と寅さん記念会館です。途中の篠崎公園も休憩等の立寄りには良い場所です。

## その他歩いた河川散策

中川：中川は荒川に沿って流れている川で、葛西橋から新小岩まで散策。特に春の新船堀橋近くにある小松川千本桜と菜の花は見事です。また行船公園も四季の花々と、見どころがあります。さらに江戸情緒の残る、金魚養殖池も立寄り場所としては外すことはできません。

新中川：瑞枝大橋から高砂橋までの散策は、特色のある橋が多く、橋を見るだけでも楽しい川です。途中の小岩大橋から西の方を見ると、富士山がかすかに見えた時は感動しました。またボートや屋形船が係留されておりなかなか風情がある川沿いです。

善福寺川：善福寺公園内の善福寺池から中野区富士見町の神田川合流地点までの散策。

橋は 70 橋近くあります。善福寺川は善福寺緑地や和田堀公園があり、特に春の桜の季節、善福寺川を覆う桜は見応えあります。また歴史的なものとしては、昭和史の中で出てくる「荻外荘」近衛文麿邸が荻窪一丁目に現存していて、今後一般公開されると聞いております。

玉川上水：羽村の堰から久我山までの散策。

橋の数は一番多くて百橋近くあり、何回にも分けて散策しました。羽村の堰には玉川上水を作った玉川兄弟の像があり、春は桜が見事です。玉川上水は遊歩道が整備されていて、武蔵野の面影が残っており、特に新緑の季節、木々に覆われた川はまた格別です。また、玉川上水の両岸にある地層は関東ローム層が剥き出しで興味がある人には必見です。

## 今後挑戦したい川

神田川：三鷹の井の頭公園から隅田川に合流するところまで、さらに足を伸ばして隅田川まで散策したいと思っています。

多摩川：自宅近くの多摩川は日々ウォーキングをして一番身近な川ですが、機会があれば源流から河口まで挑戦したいと思っています。総距離は 138Km で何日かかるか分かりませんが是非挑戦したいものです。

いずれにしても自分の健康管理のため、時間を見つけて、今後も河川散策を続けていくつもりです。

[昭島市在住 旧館林町出身]



## これも一つの仕事人生 —コミットメント



鮎川 聡  
昭和 51 年卒

「コミットメント」という言葉がある。私が館高生の頃は、日本人には馴染みが薄かったように思う。私自身は、ある事柄に対して、「有言実行し、責任を持って成し遂げる、という意思表明」、と理解している。コミットメントした段階で結果は想定しないが、結果に対する責任は求められる。

唐突に、「コミットメント」という言葉を引用したが、最近、館高生の進路状況を見ていて、自分の仕事人生を振り返る機会があったからである。日本の大学を出て、日本企業に就職するという仕事人生があるとすれば、そうでないケースもある。これは、自分の仕事人生に対する一つのコミットメントであると思う。

私は、今でこそ日本社会に浸透した、外資系企業を渡り歩いてきた。自分の意思で動いた場合もあれば、上役と合わず辞たり、親会社を買収されて、日本法人の責任者の立場から退くということもあった。この場で私事を述べるつもりは毛頭ないのであるが、そもそも、外資系企業で働くというコミットメントをした理由は何か、と言えば、米国の大学に進学したことに端を発していると思う。

私は、恥ずかしながら3年間の浪人生活を経験した。3年目が終わり、これ以上の足踏みは無理と思いつつ、結果に納得できず悶々とした気持ちを拭えずにいたところ、新聞広告で海外留学説明会の案内を見つけ、藁をも掴む思いで説明会場に足を運んだ。これが縁で、考えてもいなかった米国の大学に進学することになった。この時の自分にとっては、この選択肢しかなかったのであるが、自分の目線を変える大きな転機であったし、それに自分がコミットメントし

た、ということが人生の1つの転機（日本の大学を出て日本の企業に就職するという選択肢以外の選択肢があることを知った）であったと思う。

米国では、自由にアルバイトなどできなかったため、両親には大変な負担をさせてしまった。とは言いつつも、大学院まで終え帰国した。日本の就職活動について殆ど知らず、帰国が秋口であったため、新聞広告などを頼りに自分で就職先を探すという状態であった。ただ、どのような職業に就きたいという明確な意思はあったので、就職活動は、やはり外資系を中心に探した。それは、コンサルティングといった日本では兎も角、米国では既に浸透していた職業に挑戦してみたいと思っていたからである。つまり、この時点で外資系コンサルティングという職業に就くというコミットメントをしていた。

日本の企業では、あまり強い意思表示をすることは嫌われる場合も少なくなかったが、捨てる神あれば拾う神ありである。当時の日本では、外資系コンサルティング企業はまだ殆ど知られていなかった時代であったが、ある外資系のマーケティングコンサルティング企業に職を得た。

ここからスタートした私の外資系企業での仕事人生はコミットメントの連続であった。それはある意味自分が自分の仕事人生を切り拓くということである。そして、前述のように何度もある種の挫折を味わったのであるが、その甲斐あって自分のコミットメントに対して結果は自ずと受け入れることはできた。最近、ある有名ホテルの社長になった同級生がいるが、恐らく、その同級生もそれ相当のコミットメントをしてきたに違いないと思う。

館高の諸先輩が読者であるはずの本誌に私のような若輩者が偉そうなことを言えるはずもないが、日本人は、コミットメントということに対して、相対的に無頓着のように感じる。今のビジネスにおいては非常に求められる態度ではないかと思う。

これから卒業する館高生の後輩諸氏は、自分の仕事人生に対してどうコミットメントするだろうか、と思う。これからの仕事人生、日本と言う枠組みを取り払って、そしてコミットメントする、という考え方も選択肢として一考に値するのではないかと感じる次第である。

[埼玉県所沢市在住 太田市立西中学校出身]

# 平成28年度(平成27年10月～平成28年9月)

## 会費納入者・特別寄付者ご芳名(敬称略)

平成28年1月15日現在

《卒年、氏名(居住地)※昭和13～昭和24までは旧制中学校、④は4年卒》

◆昭18卒:宮澤春信(横浜市栄区)  
◆昭19卒:越澤浩(武蔵野市)◆昭20卒:吉田三男(川崎市多摩区)◆昭21卒:恩田進吾(杉並区)◆昭23卒:今西庸也(練馬区)、柿沼七郎(江戸川区)、角田晋一(蕨市)、鈴木敏男(足立区)、間世田英高(練馬区)、砂賀清澄(戸田市)、松本仁之(流山市)◆昭23④卒:岩崎三樹(大田区)、奈良高(世田谷区)、吉田豪利(杉並区)◆昭24卒:石川七郎(大田区)、荻野榮蔵(日野市)、小島将男(相模原市南区)◆昭25卒:栗原誠一(横浜市戸塚区)、小暮堅三(江戸川区)、高澤俊夫(柏市)、曾根吉道(墨田区)、中村茂八郎(大田区)、宮崎浩(中野区)◆昭26卒:小林淳一(江東区)、眞下欽一(松戸市)◆昭27卒:荒井昭(練馬区)、太田恵一(中央区)、車崎光(江戸川区)、齋藤又一郎(埼玉県杉戸町)、橋本清(日野市)、前橋由男(狛江市)、菫葉昌司(松戸市)◆昭28卒:荻野秀文(さいたま市岩槻区)、小西正(鎌倉市)、金野智(板橋区)、桜井達(練馬区)、蓮見重義(いすみ市)、米田稔(世田谷区)◆昭29卒:岩崎充利(練馬区)、内田耕也(日野市)、大隈清道(船橋市)、駒崎高造(川口市)、宮田秀夫(越谷市)、茂木正次(市原市)◆昭30卒:江原二三男(世田谷区)、内田信也(練馬区)、水野雅昭(神奈川県湯河原町)◆昭31卒:岡村昌二(川崎市多摩区)、篠木昭夫(文京区)、時崎庸二(春日部市)、西田一俊(さいたま市浦和区)、増尾和彦(福生市)◆昭32卒:大橋弘二(草加市)、加藤利雄(世田谷区)、塩

田昇之(大田区)◆昭33卒:鈴木勝也(台東区)、田中富士雄(町田市)、田口榮治(荒川区)、長谷川馨(大田区)◆昭34卒:富田好弘(春日部市)、延山錦吾(川越市)、渡邊紀久治(埼玉県宮代町)◆昭35卒:天谷政幸(龍ヶ崎市)、太田勝利(さいたま市大宮区)、大手常勝(白岡市)、神谷宗作(越谷市)、鈴木昇(東久留米市)、谷田部和之(越谷市)、吉澤崇(草加市)◆昭36卒:相澤建志(町田市)、石島正勝(横浜市金沢区)、江森勇(さいたま市北区)、後藤裕(鎌倉市)、橋本昌博(川越市)、墓目駿英(千代田区)、増尾哲雄(多摩市)、森田宏(横浜市戸塚区)、山岸正(古河市)◆昭37卒:小林淳二(豊島区)、正田健一(新宿区)、日高昌昭(草加市)、高橋幹男(さいたま市見沼区)、藤井基且(さいたま市南区)◆昭38卒:栗原勝雄(府中市)、濱田邦夫(豊島区)◆昭40卒:柿沢宏令(足立区)、金子和司(荒川区)、篠崎睦男(横浜市南区)、橋本康司(松戸市)、横山英和(川口市)、渡邊智三(船橋市)◆昭41卒:飯田進(千葉市緑区)、小暮勝茂(東松山市)◆昭42卒:相川敏雄(館林市)、大野操(草加市)、須永永三(川口市)、松沢幸一(さいたま市浦和区)◆昭43卒:小倉巧(昭島市)◆昭44卒:野村茂雄(文京区)◆昭45卒:小野田元伸(群馬県板倉町)、奥澤康文(さいたま市大宮区)、川嶋新一(足立区)、小林信夫(品川区)、関口勝(練馬区)、原四郎(板橋区)、三井祥正(柏市)◆昭46卒:杉田利雄(新宿区)◆昭47卒:

石川操(蕨市)、江森孝至(川崎市宮前区)◆昭49卒:新井進(足立区)、齋藤文雄(神奈川県開成町)◆昭51卒:河村博(世田谷区)◆昭53卒:中西茂則(江戸川区)◆昭54卒:小林功一(足立区)、中野栄一(新宿区)◆昭55卒:小林寛幸(市川市)◆昭57卒:神谷哲也(川崎市宮前区)◆昭61卒:深町司(横浜市金沢区)◆平5卒:五十嵐圭(浦安市)◆平7卒:大輪浩幸(荒川区)

### 特別寄付者氏名

◆昭23④卒:岩崎三樹(大田区)  
◆昭25卒:小暮堅三(江戸川区)  
◆昭27卒:荒井昭(練馬区)、車崎光(江戸川区)、菫葉昌司(松戸市)◆昭28卒:荻野秀文(さいたま市岩槻区)、蓮見重義(いすみ市)◆昭29卒:内田耕也(日野市)、茂木正次(市原市)◆昭31卒:岡村昌二(川崎市多摩区)◆昭33卒:田口榮治(荒川区)◆昭35卒:太田勝利(さいたま市大宮区)、神谷宗作(越谷市)、鈴木昇(東久留米市)、谷田部和之(越谷市)、吉澤崇(草加市)◆昭36卒:相澤建志(町田市)、後藤裕(鎌倉市)、墓目駿英(千代田区)◆昭37卒:小林淳二(豊島区)◆昭39卒:濱田邦夫(豊島区)◆昭40卒:篠崎睦男(横浜市南区)、横山英和(川口市)◆昭43卒:小倉巧(昭島市)◆昭44卒:野村茂雄(文京区)◆昭45卒:原四郎(板橋区)◆昭53卒:中西茂則(江戸川区)◆昭61卒:深町司(横浜市金沢区)

## 年会費納入のお願い

平成28年度(平成27年10月～平成28年9月)の年会費3,000円を未納の方は、①氏名、②卒業年、③住所・TEL、を明記していただき、下記口座に送金をお願いいたします。

・郵便振替 加入者名 館高東京同窓会  
口座番号 00160-8-773981

ゴルフ部会

好天のもと  
21名で熱戦を展開

ゴルフ部会(中村茂八郎部会長)は、11月12日(木)埼玉県上尾市の大宮ゴルフコースを会場に、好天に恵まれたゴルフ日和の中21名が参加して行った。

大宮ゴルフコースは、昭和34年、プロゴルフ界の草分け浅見緑蔵氏が設計した武蔵野の面影を残すフラットな林間コース。セミ・パブリックだが、赤松の太木に囲まれた各ホールは距離がしっかりある、歴史を感じさせる名門コースと呼ぶにふさわしいたずまいのコース。

この会場設定が功を奏してか、24名の参加申し込みが有り(途中3名不参加に)、当初4組16名規模を見込んでいた幹事が、再度にわたってゴルフ場に組数増の申し出をするという事態となった。

初参加者は川生宏(S31年卒)、鈴木攻(S37年卒)、野村茂雄(S44年卒)の3名の方々。

19番ホールは、最高齢の昭和5年生まれの中村茂八郎部会長を筆頭に、昭和一桁生まれの曾根吉道、小暮堅三、荒井昭、車崎光知、曾根利夫、中村貞夫、小林敬八の皆さんが、長年のゴルフ歴から掴み取った数々のうん蓄を披露し、80歳を越す年齢でゴルフをプレイできる喜びを口々に、楽しいひと時を過ごした。

◎ 成績は以下の通り(プレーは新ペリアにて実施)

優勝	曾根利夫(S28年卒)	97打	HC24.0	NET73.0
準優勝	車崎光知(S27年卒)	100打	HC26.4	NET73.6
第3位	荒井昭(S27年卒)	85打	HC10.8	NET74.2
第4位	小林敬八(S28年卒)	90打	HC15.6	NET74.4
第5位	大輪浩幸(H7年卒)	96打	HC21.6	NET74.4
※ベストグロス	荒井昭(S27年卒)	グロススコア	85打	



おしらせ

逝去会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

(平成27年4月以降に連絡のあった方)

◆昭和18年卒:永沼久太郎◆昭和23年卒:原口廣◆昭和24年卒:石川七郎◆昭和27年卒:栗原明、松崎(栗原)滋夫、三田成男◆昭和28年(定)卒:小林國夫◆昭和29年卒:青木三郎、荒井賢一、時崎義男、吉澤義文◆昭和30年卒:伊藤勉、高橋重夫、吉田陽実◆昭和33年卒:岡村貞夫、篠田健夫◆昭和35年卒:目崎捷俊◆昭和36年卒:落合克昭、篠原稔

観桜懇親会のご案内



この写真は早稲田大学竹友会ホームページより転載しました

日時:平成28年3月26日(土)  
午前11時~

会場:ホテルグランドパレス  
1Fレストラン 個室

東京都千代田区飯田橋1-1-1  
交通:東京メトロ東西線、都営地下鉄九段下車(3分)  
JR総武線飯田橋駅下車(5分)

参加費:1人6,000円(当日受付)、ご家族同伴の場合  
2名で10,000円

「早稲田大学竹友会OB会」の方々による“尺八・箏・三弦による演奏”を披露します。桜花の季節のひと時、邦楽の優雅な調べをお楽しみ下さい。

・お申込み:氏名、卒業年、住所、電話番号、1名参加か2名参加かを記して下記へお申し込みください。

館高東京同窓会事務局

〒343-0021 越谷市大林74-5 谷田部 和之

FAX 048-974-6680

E-mail kyatabe@ozzio.jp

編集後記

第30号会報をお手元にお届け出来ました。総会時に行った松沢幸一氏の体験に基づく示唆に富んだ講演内容要旨はもとより、ご寄稿いただいた原稿はいずれも、書き手の人柄がにじむ読み応えのあるものばかり。年代を超えた人々の集まりである同窓会誌ならではのものが揃いました。忙しい中を快く執筆頂いた諸氏に感謝申し上げます。

また、今号では28年度年会費を納入頂いた皆さんの氏名掲載、名刺広告スペースを2頁に拡大しました。財政危機にある会運営の一助が目的です。既に協力いただいた方々には感謝申し上げますとともに、未だ28年度会費納入をお忘れの方は15頁に記載してある口座に振り込みをお願いするものです。(Y)